

エッセイ

山武市指定文化財(史跡) 妙宣寺の史跡(埴谷)

妙宣寺は豪族埴谷重義の氏寺として南北朝時代の康安元年(一三六一)に建立されました。また、埴谷重継の次男として生まれた日親のなべかむりが有名です。

日親は時の將軍足利義教公に「立正治国論」を建言し、法華信仰を勧めた為に怒りにふれ、拷問されました。これは熱い鍋を頭にかぶされたが、耐えて信念を貫いたとされ、「鍋冠日親」と呼ばれました。境内には応永八年(一四〇一)の下総式板碑となべかむり日親の歌碑があります。



妙宣寺の史跡

五合庵の座ぶとん

埴谷 大掛 史子

令和五年五月、水張田に雲が映り、菖蒲咲き盛る美しい新潟の地を旅した。

良寛に関する著作を多く持つ黒羽由紀子さんが企画されたその旅は、日本詩人クラブ新潟大会出席を足がかりに長岡に二泊し、良寛ゆかりの地をめぐるものだったが、何と全国良寛会小林正芳会長と柳本広司副会長、安達武男長岡支部長がご案内くださるといふ豪華な旅で、参加者は日本詩人クラブの曾我貢誠さん夫妻、鈴木昌子さん、永井ますみさん、黒羽由紀子さんと私。五合庵のある国上山はかなりの急峻で、バスが喘ぎながら登りついた所から二〇〇メートル以上あるかと思われる釣橋を手すりにしがみつきながら渡り、さらに山を分け入りやつと巨木の森にたどりつくと大木に抱かれるようにひっそりと五合庵は建っていた。

釣橋の下は深い谷で覗きみるのも怖かったが、良寛の住んでいた当時は橋など無く、托鉢のため急峻な山道を降りたり登ったりしながら歩いたのだろう。

巨木の立ち並ぶ森に抱かれ、五合庵は静かに瞑想しつつ待っていてくれた。建物は大正時代の初め建て直され

たものだと書いてある。ついでに立札の文字を拾うと

「焚くほどは風がもてくる落葉かな」の良寛句と一緒に故事が述べられ、五合庵で清貧無一物の暮しと共に修行する良寛を敬慕する人が多いことから、時の長岡藩主が「城下に寺と住居を与えるから山を下りてこないか」と誘ったところ、「日々煮炊きするのに必要なものは風が落ち葉を運んでできてくれますので足りております。私はこの山の中で清貧無一物の暮らしを続けたいのです」の意を込めてこの句を使者に渡したという。

黒羽由紀子著『索々たる五合庵』は良寛の詩からタイトルが採られている。

索々たる五合庵

実に懸磬けんがいの如く然り

戸外杉千株

壁上へきじょうけ傷数篇

釜中時に塵有り

甌裏がり更に烟無し

唯東村の叟有りて

頻りに叩く月下の門

(何ともわびしい五合庵です。打楽器の磬をかけたような室内でがらんとしています。外は杉が立ち並び、壁

には書いた詩を幾枚か貼ってあります。釜には時に塵がたまることもあるし、かまどに烟が立たないこともあります。隣村の老人が訪ねてきて、月明りのなかでしきりに門を叩いています。」

黒羽さんは著書の中で、三〇年ぶりに訪れた五合庵が、変わらぬ優しさで迎え入れてくれ、濡れ縁に赤い座ぶとんが三枚置かれ、まるで良寛が「よく来たね」と迎えてくれているように感じた」と述べている。

実は私もそのとき黒羽さんと一緒に五合庵の縁先に初めて立ち、「あら、お座ぶとんまで用意されていて」と思わず声に出してしまつたほど、その古びた座ぶとんの置かれ方がいかにも「遠くからよく来たね、さあどうぞ、休んでいきなさい」と懐かしい声を発しているように思われ、そこに腰かけさせていただいたのだった。かねて憧れながら初めて訪れることのできた五合庵、再び訪ねることはかなわないだろうこの山深い聖庵、良寛のみ魂は確かにいて、にこやかに私たちに対峙してくれている。私は心の中で、三十四年前旅立つた夫に語りかけていた。「あなた、五合庵をやつと訪れることができましたよ」と。夫は鉢の子一つで飄々と深く生きた良寛に憧れつつ、バブル期の大企業で俗塵にまみれ、五十代前半で過労死した。夫が、内深く抱えていた良寛への敬慕、普段は都

会のマンションから職場という戦場に出陣しながら、千葉の田舎に建てた山小屋を「五合庵では恐れ多いから」と「二合庵」と名づけ、休息と俗塵からの慰安と活力再生の場としていた彼の憧れの根源の場にいま居るのだった。

五合庵に抱かれていると清貧無一物の豊かさ、簡素を極めた日常の清らかさ、余計なものから解放された魂の自由をひしひしと感じ全身が洗いたてられるような浄化の歓びを覚える。何も無い、簡素な五合庵の縁先にさりげなく置かれていた三枚の薄い座ぶとん、はるばると訪れた者をやさしく迎え慰撫してやまぬそれは良寛の魂そのものであった。

初めての闘病

八街市(さんぶの森吟行俳句会) 戸村真理子

令和七年三月十四日、久しぶりの乗馬。常歩から速歩へと進み、駆歩発進の脚を入れた瞬間、馬が前脚を高く振り上げ、私は一メートル六十センチの馬の背から落下。直ぐ救急車で搬送されることになった。

救急車内で、隊員がきびきびと容態をチェックしながら病院を検索。病院に着くと、担当医が「足は痺れていませんか？お尻の穴は締められますか？」と尋ねた。この確認で、下半身の神経に異常がないことが分かったとのこと。検査の結果、第三腰椎破裂骨折という大変な骨折なので、ボルトで支える「後方固定、椎体形成術」という手術をすることになった。

その後、コロナに感染していることが解り、濃厚接触者の夫は病院に來られない状況となった。私は、個室に隔離され、激痛と不安とで一睡もできず、脊椎カリエスの痛みに苦しんだ正岡子規を想った。

「落馬して子規の痛みや春の闘」と、一句浮かぶ。翌日から防護服を纏った看護師が、昼夜二交代でできばきと、私の世話をそれは親身してくださった。ベッドは上半身を最大三十度までしか起こすことができず、また、

常時加圧ポンプでふくらはぎを揉んでいた。腰は、激痛が走るので寝返りも打てない。それでも本を読んだりメモ書きをしたりして過ごせるのは嬉しかった。寝たきりの子規の苦しみに比べたら、手術すれば退院できる私は幸せだと自分に言い聞かす。「あなたはあなたらしく、これからも精一杯生きていきなさい」と励まされたように思われた。

次に苦しいのが便秘。浣腸したり下剤を飲んだりして、やっと排便ができた時は思わず涙が出た。看護師二年目のOさんが「戸村さん、頑張ったね！」と誉めてくれる。ベッドの上の本から、絵本やおはなし会の話でしばし盛り上がった。五日後、ついにコロナ解除。防護服なしの看護師が「換気しましょう」と、窓を広く開けてくれた。遠くに白い花が見える。

二十日、祝日の面会は午後一時からだ。食事を済ませ、夫が来るのを今か今かと待つ。一時過ぎ、案内の方の後ろに、両手に大きなバッグを持った夫が見えた。しばし言葉にならず握手。夫は頼んだ物をテーブルの上にならべ、それぞれ、家の様子や病状を伝え合っていると「時間でずと、係の人の声。「えっ！」たった十五分のみのお話。ずっと待っていたのに！話したいことがいっぱいあるのに！まるで名画のラストシーンのように、もう一度

手を握り合って「じゃあ」と別れる。

翌日、手術の説明に担当のK医師が見えた。若くてハ
ンサムな先生だ。「大丈夫。手術をすれば、乗馬もでき
ますよ」なんと頼もしい言葉だろうか！ 夫は翌日も来
て、手術日や医師との面談日が決まっていくな。それに向
けて、エコーやCT、MRIなどの諸検査、コルセット
の採寸、全身シャンプー、麻酔科や歯科の医師の問診な
ど、次々に担当の方が見える。一般の個室に移ると、名
前を覚えきれないほどの看護師や介護士、清掃や食事や
入浴など沢山のスタッフがお世話をして下さる。動きに
無駄がなく、それでいて心がこもっていてどの方も優し
く明るくて気持ちいが和む。

そのプロフェッショナルぶりに感動して、「ありがと
うございます」とお礼を言うと、「いいんですよ、仕事
ですから。私たちは、医療チームですから」と、さわや
かな言葉が返ってきた。一人の患者をこんなに多くのス
タッフが支えてくれているのだ。感謝しかない。

三月二八日、遂に手術日。一日絶食。朝八時から点滴
開始。K医師や麻酔科の先生が体調の確認に見える。十
二時、夫が一時間も前に病室に着く。検温や血圧の測定
などを終えて病室を出る。ベテラン看護師二人がストレ
ッチャーを押し、夫が側に付き添って手術室へ移動。コ

ロナの時からお世話をしてくれたI看護師が、「通路の
桜が咲き出したから見ていくといいわよ」と、声をかけ
てくださる。三階通路の両側の桜は三分咲きだった。

いよいよ手術室に入る時、「がんばれ！」と握りこぶ
しを上げる夫に「うん、頑張るから」と、精一杯手を振
り返す。そして、全身麻酔による三時間にわたる手術を
終えた。夫はK医師から手術の状況を詳しく聞いた後、
病室に来て、「手術は大成功だよ。頑張ったね。痛みは、
二日間我慢すれば楽になるそうだから頑張ろう」と労っ
てくれた。

その後、麻酔が切れだして痛みが激しくなってくる。
麻薬や鎮痛剤を貰っても、どうにも我慢できない。その
夜、映画で観た麻薬患者の幻覚そっくりの夢にうなされ
続けた。翌々日まで熱と痛みとで、食事はもちろん、夫
や姉への電話やメールを開くこともできなかった。

術後三日目の月曜日の朝、K医師が見え、「傷口を見
せて。テープをはがすよ」と、B5版ほどの分厚いテー
プをビリビリはがす。痛さに呻いていると、「上体を起
こしてみよう」と、背に手を当て、魔法をかけたかのよ
うに起こしてくれた。十七日ぶりの垂直の姿勢！脳がグ
アングアンと揺れているかのように。ベッドの傾きは術
後四十五度までになったが、さすがに九十度はきつい。

よし、これからは椅子に腰かけて慣らしていこうと決める。午後からリハビリ開始。車椅子でリハビリ室へ移動。立ったり座ったり、段差や坂など一通り試みる。どれも一回でクリアーし、「戸村さん凄い。百点満点！」と先生。翌日は、リハビリ室を出て長い距離を歩いていると「綺麗ですね」と先生。「えっ？」と聞き返すと「戸村さんの歩き方はとても綺麗です。姿勢がいいですね」と言われた。

その日は、車椅子の練習もしたので、一人で車椅子に乗り介助なしでトイレに行ってみた。もうこれで、夜中も看護師さんに来てもらわなくて済むのだ。思わず俵万智風に「車椅子乗って一人でできたから今日は私のトイレ記念日」と一首。その後、チューブも外れ、一人で院内を歩き売店で買える物までできるようになった。リハビリ四日目は、初めて病棟の外を歩いた。石ころや段差があり、実戦練習といった感じだ。突然、強い風が吹き付け「わあ、『雨にも負けず風にも負けず』ね」と二人で詩をつぶやく。

その日のリハビリが終わった時、「これなら、来週の退院も可能ですね」と太鼓判を押してくださった。翌朝、病室に来てくださったK医師も「来週の退院大丈夫ですよ」「本当ですか？」と、何度も先生に念を押すと、さ

わやかな笑顔で頷いてくださった。

救急隊員の迅速な判断に始まり、執刀医をはじめ多くの医療スタッフの的確で親身な処置、そして、家族や友人たちの温かな励ましに守られて、予定よりもずっと早く退院できることになった。その夜は、夫と姉への長い電話になった。一か月にわたる入院で、三分咲き、五分咲き、そして満開と、今年はたつぷりと桜を愛でることができた。そしていよいよ四月十一日、退院の日、その桜ももう葉桜へと変わっていた。

一か月ぶりの我が家、縄文の丘の花や樹たちすべてが愛おしい。一つ一つに「ただいま」と声をかける。翌朝、夫と二人の朝食。今までは一人での食事だったが、今日からは、二人でおしゃべりをしながら庭を見ながらの楽しい食事ができるのだ。リビング前の桃の木も楓も椎も、すべてがそれぞれの美しい緑を輝かせていた。

- 春昼やベッド一つの吾が宇宙
- ナースから「今日で解除よ」春の雷
- 病室の窓いっぱい辛い夷咲く
- 面会の夫待つ春や髪を梳く
- 手術後の痛みや子規も春の闇
- チューブ外れ一人散歩の春の朝

○満開の花に誘われりハビリを
○花は葉に感謝感謝の退院日
○庭若葉愛でて二人の朝餉かな

「さざなみや」

成東 渡邊美佐夫

今から二十年位前に旧友十名で旅をした。集合場所は三井の晩鐘で有名な三井寺の鐘の前であった。約束通りに十時迄には全員が集合した。皆いつも通りの笑顔であった。

もっと昔に除夜の鐘を聞きに京都の知恩院の鐘を見に行ったことがあったが、その鐘にも劣らない大きな鐘であった。全員手で叩いたり押ししたりしたがゴトンという音がただけだった。

皆で話し合って琵琶湖を時計まわりに史跡を訪ねるところにした。

最初は琵琶湖の北側の賤ヶ岳である。羽柴秀吉らと柴田勝家らの戦場である。

山へ入るとすぐにリフトに乗り中腹で乗り替えて頂上についた。前方に琵琶湖が見えてきた。空を仰ぐと鷹柱が立っていた。

「おお鷹柱だ」皆が見上げた。鳥達は高く高く舞いあがった。この時の私の一首である。

「戦国の歴史訪ねし賤ヶ岳見上げる空に鷹柱立つ」。

次に湖の北側の湖に着いた。天女が舞い降りたことで有名な余呉湖である。琵琶湖にくつつくような小さな湖であり傍らに大きな松の木が一本立っていた。若い時に訪れた三保の松原を思い出した。

丁度昼時だったので近くの食堂「余呉」で鰻重を食した。皆すっかり元気になった。

木の本へ到着。北国街道の分かれ目である。各家の前には地藏盆の準備のために雪洞が立てられている。子供達は着飾って走りまわっていた。その夜は長浜へ宿泊して一日の反省をしながら宴は遅くまで続いた。信長や秀吉の話はつきなかつた。飲むほどに皆が歌いはじめた。

「我は湖の子 さすらいの 旅にしあれば しみじみと 昇る狭霧や さざ波の 志賀の都よ いざさらば」。

それぞれに若い日を思い出して六番まで歌った。

いよいよ安土城に到着した。駅前には織田信長の大きな像が立っていた。駅裏側から全員並んで歩きはじめた。左側は崖となっていて用心しながら登って行った。二十分位で安土城に到着。ここに信長は天守閣を造って天下に号令を下したのであった。やや遠くには琵琶湖が光って見えた。キリスト教を認めていた信長は最上階で琵琶

湖を眺めたのであろう。この城も短期間で廃城となった。近くには当時の住居跡がありそれぞれの武将の名前が名札で立っていた。まるで分譲住宅のようであった。

そのまま三十分も歩くと浅井長政の小谷城に達した。お市の方は秀吉らに城を焼かれて三人の娘を連れて出て来たと言われる城門に近づいた。振り返るとここからも琵琶湖が見えてきた。松を大きく揺らして風が吹きはじめた。根元には瓦などのかけらが小さく割れて散らばっていて哀れであった。安土城、小谷城を見て皆感動していた。帰路安土城に近づいた頃、友人の横倉君が皆に話をしてくれた。彼は若い頃に中国の北京を旅行した。北京の路上で喫煙したら警官に見つかって罰金を払わされたと言って皆を笑わせてくれた。

最後の夜は天津の「さざなみ荘」に宿泊した。翌日は蒲生野を訪ねた。それほど遠くはなかった。蒲生野には紫草が一面に植えられていた。更に進むと有名な額田王のうたが大きな大理石に刻まれていた。

「茜早指武良前野逝標野行野守者不見哉君之袖布留」である。

「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」

今回の旅の最後に平忠度の歌碑を訪ねた。蒲生野からはそう遠くはなかった。有名な「長等山」はすぐに見つかった。真夏の山はどこもかしこも草がはびこっていた。坂を登るのも大変で全員汗を流してたどりついた。

「あつた」高さ三米、巾一米の立派な碑であった。皆は声を出して読んだ。平家は源氏に追われてから忠度が詠んだ歌である。

「さざ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな」このうたを全員で口遊みつつ山を下った。

琵琶湖がすぐ前に見えてきた。

今考えてもいい旅であった。

友よ ありがとう！ 皆若かった!!

さんむの味

殿台 渡辺なるみ

毎週日曜日の早朝、山武市役所の駐車場で、成東朝市組合さんが朝市を開催しています。主に農家の方が畑から収穫したての季節の野菜や米、しんこ餅、太巻き寿司、赤飯、たまご、また大人気その場で揚げている三百円の大盛りてんぷらや格安の手作り総菜、刺身こんにやく、漬物などが販売されています。

またコーヒ―、ココアなどのカフェ、パン、ケーキ、クッキーなどの甘いものも素敵でかわいらしく、そして、かぞく亭さんの醤油ラーメンは大盛況で立ち食いラーメンとなつています。また、季節の切り花やレコードなどの骨とう品、お皿やノートなどのリサイクル品も販売され、スーパーに行かなくてもだいたいは朝市で揃ってしまいます。なんと、わたしはスーパーへ行く回数が減りました。

特に朝市に毎週通つてしまう理由には、売られている総菜、漬物に理由があります。わたしが小さい頃、おばあちゃんが作っていたおかずのオンパレードなのです。それに気がついたのは、今年、二〇二五年夏の朝市で購入し、辛子なすを食べたとき。すごく辛くて、脳が刺激

されたのか、小学生の頃の味覚の記憶が、これでもかとあざやかに蘇りました。当時こどもの舌には、辛子が辛くて辛くて、ほとんど食べられなかったと思うのですが、なぜかはつきりと覚えているのです。

辛子なすの発祥は山形県のようなのですが、成東の実家のおばあちゃん（享年一〇二歳）も作っていました。朝市でもおばあさんが販売しています。一般的な漬物なのかもしれないませんが、なぜか、「これは、さんむの味!？」と妙に確信してしまいました。

そこに気がついたのでからは、手作りのぬか漬けや唐辛子みそ、太巻き寿司など、スーパーで販売されている品物とは明らかに違う手作りのさんむの味に敏感になりました。そして、おばあちゃんから作り方を教わらず、流行りばかりに気を取られ、さんむの味を忘れていたわたしは、「そもそも、この味を食べたこともない若い世代のさんむの人たちがいるのだ」と気がつきました。このままでは、きつとたぶん、ある日ひっそりと、朝市から消えてしまい、そのさんむの味は消えていってしまいます。

レシピはあるのでしょうか?おばあさんたちにもきつと覚え書きのようなものがあるはずですが。漬物でいえば、塩の分量や砂糖の分量、そして、かくし味。世の中の料

理研究家のレシピ本には載っていない、テレビやネットでも出てこないさんむのおばあさんたちのレシピ。

朝市のおばあさんは山武市に住んでいらっしやるのでしょうが、わたしとはまったくの他人です。朝市での販売者と購入者です。

これから、春も夏も秋も冬も、毎週毎週、日曜日の朝、朝市に通い詰めて、顔見知りになり、いつか秘密のさんむの味のレシピを教えて頂きたいものです。

ある日、そっと、朝市から並ばない日が来ないでほしいのです。

幻のフルーツ ポポー

姫島 鵜澤美知子

昨年（令和六年）十月、他県に住む息子から、「東金の道の駅に、ポポーが売っているらしい。食べてみたい」と、メールが届いた。

「勤め先の同僚が、茨城県の道の駅でポポーを買ったというので、調べてみたら、東金の道の駅 みのりの郷にもあることが判った。公式サイトを見たら、九月から売っているようだ。まだあるかも知れないと思って」とのこと。みのりの郷で売られているのは、私も偶然知っていた。

ポポーは、若いころに味わった私にとって、懐かしいフルーツの一つである。濃厚な甘みと、バナナや柿、プリンに似た味わいで、ねっとりとしたクリーム状の食感が特徴だ。柿の種に似た、少し大きい黒い種が、二列に入っている。

五十年以上前のこと。九十九里浜沿岸にある生家の裏庭に、父が植えたポポーの木が一本育っていた。私も好んだが、特に祖母の大好物であった。後年、ポポーといえば、笑顔で食べていた祖母を思い出すほどである。

私が近年になってから食べる機会を得たのは、十年ほ

ど前。山武市内の農産物直売所で、数パックしか並んでいなかったのを見つけ、買った。その後は買う機会を逃していた。

五年ほど前、私がポポーを好むと知った九十九里町の知人が、庭で実ったのを届けてくれた。その時に食べ、庭先に埋めた種が発芽し、今では二メートルほどになっている。

でも、これまでに花は見たことはなかった。

* * *

息子の希望を叶えるべく、みのりの郷へ行ってみた。二十パックほど並んでいたので十パック買い、息子と、都内に住む娘にも送った。

東金市産で、三個入り三六〇円。ラベルには、「別名森のカスタードクリーム。マンゴー、バナナ、パイナップルを足して割ったような甘い果物」とあった。

初めて食べたという息子は、

「クリーミーでおいしかった。傷みやすいので、スープなどでは売っていないらしい。冷凍しても良いみたい。アイスやシャーベットにした加工品もあるようだね」とのこと。

十月下旬、みのりの郷には、すでに「ポポーコーナー」はなかった。店員さんが、「ポポーは、木からポトンと

落ちた実が、食べごろなんですよね」と、教えてくれた。

この会話がきっかけとなり、調べてみると、ポポーがなぜ「幻のフルーツ」と呼ばれるのが判った。熟すと傷みやすいので、流通に向かないためだという。

AIにより、さらに詳しく知った。

・賞味期限が短い。完熟すると非常に柔らかくなり、傷みやすいため、長距離の輸送や大量生産が困難。

・傷みやすさに加えて、皮の変色も起こりやすいため、市場での流通が難しく、結果的に一般のスーパーなどではほとんど見かけない。

・北米原産の、寒さや病害虫に強く栽培に手間がかからない果樹。明治時代に観賞用として導入された。昭和の初めころにブームとなった後は、栽培者は減少。

・別名に、ポーポー、ポポ、アケビガキ、カスタードアップルなど様々な呼び名がある。

・近年、育てやすさと豊富な美容成分から健康食品としても注目されている。ビタミンCやビタミンAなどの栄養素があり、美肌効果や免疫力がアップ。食物繊維や鉄分なども含み、「天然の滋養強壮剤」とも称されるスーパーフード。

・熟すと自然落下し、翌日には熟成が進み、皮が黒ずんできたころが食べごろのサイン。

・産地は、一関市（岩手県）、横瀬町（埼玉県）、湯布院（大分県）、吉野川市（徳島県）などで、ジャムやジュース、お菓子などの加工品も作られている。

・品種や種類によって色や香り、甘さに違いがある。大きくて甘さが濃厚。巨大で種が少ないのや、果肉が乳白色の品種もある。日本国内で普及している品種は、果肉がオレンジ色で、数種類のポポーを扱う販売店もある。

* * *

令和七年の年賀状に、ポポーの枝葉と実を描いた。アケビに似た形で、実を切った時の、完熟した色合いの果肉のオレンジ色を出すのに苦心する。

すると、友人たちや親類からの返信があり、長野県松本市在住の高校時代の友人、M子さんからはこう書かれていた。

「ポポー、懐かしいです。二十代のころ、お宅にお邪魔したとき、お庭に木があり、あなたのおじいさんから初めて聞いた果实名です。こちらで食べたのは、それから四十年ぐらい経ってからです。今も近くで木を見かけるので、育てている家はあるようです」

芝山町出身のI子さんは、

「父親が実の成る木が好きで、ポポーの木もビニールハウスの中に大事に植えてありましたが、大きくなつてき

たので切ってしまいました。一度食べたことがあり、甘かったです」

とのこと。

妹は、長野県佐久市方面へドライブに行ったとき、農産物直売所に売っていたのを見たという。

弟からのポポー情報は意外だった。生家で育てていたあの古いポポーの木は、三年前まで育ち、実をつけていたという。弟が移植し、枯れてしまったそうだった。

年賀状の返信には、食べたことのある人は少なく、食べてみたいという人はあった。

今年四月、大網白里市の花友達のKさんから、畑で育つポポーに花が咲いたとの知らせをいただいた。我が家の木はどうかしら？と見ると、何と四輪咲いているではないか。

初めて見る赤紫色の、色と形に驚く。シヨックを受けた。独特な香りがし、ハエが次々に寄ってくるので不思議に思い、調べる。

・三月下旬から五月下旬にかけて咲く。釣鐘状で大きく、一つの花に雄しべが数本ある。肉が腐ったような独特な匂いを放つため、不快に感じる人もいる。花が放つ腐敗臭がハエを呼び寄せ、受粉を促すのだという。

同じ品種の木だけでは受粉しにくく、実がなりにくい性質を持つため、異なる品種のポポーを二本以上植えることが推奨される。人工受粉の方法もあるとのこと。

・ポポーの種蒔き時期は、五月から七月ごろ。実がなるまで、地植えで五年ほどかかる。

我が家では今年、花を見ることはできたが実はつかなかった。木が一本だからだろうか。弟の所のように一本でも、実がつくことを期待しよう。

昨秋みのりの郷で入手して食べたあと、種を植木鉢に蒔いておいた。八月上旬、思いがけず二本が発芽しているのに気付き、胸が弾む。どのように育っていくか、観察して確かめたい。

私は生でしか食べたことはなく、他の食べ方を工夫する考えは持っていなかった。食べ頃になったら冷蔵庫で保存するということも知らなかった。冷凍保存するには、皮をむいて種を取り除き、食べやすい大きさにカットするとのこと。

いくつかの食べ方を知ったので、次に入手したらぜひチャレンジしてみたい。完全に凍らせてからミキサーにかけて、アイスシャーベットに。二時間ほど凍らせたポポーと生クリームをミキサーにかけてジェラート。冷凍し

てバナナなどの果物やヨーグルトとミキサーにかけてスムージーも絶品らしい。

硬い種を取り除き、ザルで裏ごししてピューレ状にし、牛乳を混ぜて氷を入れた写真を見た。おいしそうだ。早く作ってみたい。

ポポーの花言葉は「健康」。バナナやリンゴに匹敵する栄養価があるからか。

こうして、いくつもの情報を得られ、まるで新しい果実に出会えたような気がする。

ポポー、ありがとう！

管理の中で

森 佐藤美保子

痛みにたえきれずに突然の入院となった。あちこち、ぐるぐる検査行脚すること長し。二時過ぎにようやく病室へ。疲れがどつと出てベッドへ倒れ込む。

これが又ビツクリ、カーテンだらけに囲まれている。人の姿は見えない。全部ベッドに囲まれたカーテン個室だった。ナースと患者のやりとりの声ばかり。唯一ナースとの接点だけの患者なのだ。プライバシーはバツチリだ。そこへ私も。きちんと管理と安心の病室なのだ。

患者は皆んな静かで姿も声もめつたにない。接点はナースのみで用は全部足りる。これが行き届いた最新の医療の現場なのだ。人と人とは退院迄つながらない。今のキチンとした、医療の現場になった。

昔は誰ともつながり、おしゃべりがあった。今は世間話だなんてない。病気を治してもらったための病院だと患者側は心得ているから、尚のこと当たり前となっている。主治医はめつたに見えない。頼るはナースのみ。

夜はさみしいからかナースコールは急ににぎやかになる。誰もさみしいのかも。ケータイでおやすみもメールも有りなのだ。

病院は人の心の管理迄は無理なのだ。患者は早目に眠りの中に。良く出来ている。心のつながりは人と人しかない絆にある。営業マンも管理の任を負い大変だ。大きなところは一定の管理は欠かせない。日々進歩の今日、心の負担は自ら解消しないとだんだんと、重くなるばかりだ。現状に合わせなければ、遅れをとることに。バランスをどの辺にとるか難しい。

長生きの時代に、年と共に認知症にならないためにも、自分を前へ押す努力とみがきがのしかかる。進歩の中で、前進はいつでも自分次第、みがきと努力にある。

戸村茂昭さんを偲んで

千葉市(元下布田) 田野 圭子

戸村さんの後半生は伊能忠敬研究をしたことにつきると思う。伊能忠敬の科学的測量における天体観測の方法と観測データの解析やそれらの発表を実施、マスコミや新聞を介しての発表など、「文芸さんむ」にも伊能忠敬についての評論や詩でたびたび投稿しているので、知っている方も多いのではないかと思われる。

戸村さんは成東高校を卒業し電電公社のデータ通信事業本部(現・NTTデータ)に入りながら、都立大学工学部電気工学科の夜間部を卒業した。NTT時代は、どの企業も尻込みをした当時としては大規模な全国ネットワークの郵便貯金システムの中核メンバーとして開発に従事した。また全国の郵便局それぞれに何台のATMを置くのかを算出し配置した。後にこのNTT時代が伊能忠敬研究との運命的な出会いであったといえる。

一、上司の渡辺さん伊能忠敬研究会発足

渡辺一郎さんが日経記事で伊能中図があることを知り、フランスのパリ郊外の伊能中図の所有者イブ・ペイレ氏宅を訪問し、伊能中図の日本への里帰り展示を要請し、朝日新聞夕刊で紹介された。

この朝日新聞の記事を見た伊能家七代目の伊能洋さんの妻・陽子さんから渡辺さんに電話があり、伊能家のめぼしい史料・地図は、佐原市(当時)の伊能忠敬記念館に寄付してあるが、世田谷の伊能家にもあるので見てほしいとの話だった。この事から伊能家との付き合いが始まり伊能忠敬研究会の発足にもつながった。

一九九五年十一月フランスの伊能中図の佐原での公開期間中に、渡辺一郎、伊能陽子、安藤由紀子、芳賀啓、齊藤仁、清水靖夫らが発起人となり伊能忠敬研究会を結成することになり、会場で参加を呼びかけ始めた。一九九五年十一月〜一九九六年三月、伊能忠敬研究会会員募集の輪を広げ、全国から歴史家、社会科教師、大学教授、主婦、測量技術者、忠敬ファン、土地家屋調査士など多彩な顔ぶれが入会した。会報の一冊目(渡辺一郎の個人レポート「伊能図探求」を継承し、号数は第七号とした)を一九九六年三月一日に発行した。

伊能忠敬研究会代表理事・渡辺一郎さんは二〇〇一年、米国の議会図書館地図部で伊能大図写し二〇七枚の所在を発見した。全大図二一四枚の内二〇七枚で、欠図は七枚である。日本国際地図学会、伊能忠敬研究会、日本地図センターの合同記者発表をおこなう。朝日、毎日、日経、産経、東京の各紙一面の大ニュースとなった。読売

は社会面の大部分を当てていた。

二、イノペディア発足

渡辺さんは伊能忠敬研究会の他に伊能忠敬と伊能図に
関してあらゆることがわかる百科事典を作りたいと思っ
た。そこでN T T時代の部下・戸村茂昭さんに声をかけ、
二〇一〇年WEBサイトにイノペディアをつくる会を立
ち上げた。会長・渡辺一郎、編集幹事・戸村茂昭の二人
で始めたのである。また成東高校時代の三年間同じクラ
スであった高宮勲さんが伊能忠敬の子孫であることを知
り、運命的な出会いを感じ伊能忠敬研究に邁進していく
のである。

新聞でイノペディアの協力者を募りS Eの横溝高一さ
ん、竹村基さん、N T Tの後輩の稲葉末明さんが合流し
た。渡辺さんはN T Tの大規模プロジェクトの仲間では
ないかと喜んだ。

イノペディアが中心になり実現させたのは平成三〇年
(二〇一八) 忠敬没後二〇〇年記念、伊能測量協力者顕
彰大会だった。イノペディアで二〇一六年、江戸時代に
伊能忠敬の測量に協力した子孫を探して、協力者約一万
二人の名前をデータベース化して発表した。支援者の
子孫が保存・伝承している未公開史料発掘とともに、顕
彰を進め交流の場とするのが狙いであった。

伊能忠敬は一八〇〇年から一八一六年に北海道から九
州を歩き測量している。その際、全国各地で測量に協力
したと思われる宿の提供者や案内人など、測量日記二八
巻に記載されていた人名を都道府県、市町村別に日にち
を追ってデータベースに表示した。システムは横溝さん
が作り、戸村さんが窓口になり約二年かけて伊能測量隊
の協力者を探した。

伊能測量協力者顕彰大会が東京都千代田区の学士会館
で四月二一日、二二日、開催された。協力者の子孫約一二
〇名、伊能忠敬研究会会員など約六〇名、合計一八〇名。
挨拶、祝辞など以下の方々。

伊能忠敬研究会理事(島根大学名誉教授) 高安克己。
伊能忠敬研究会会員(東京農業大学客員教授、榎本武揚
子孫) 榎本隆充。国土地理院院長 村上広史。幕府葦山
代官子孫 江川洋。伊能忠敬研究会代表理事 鈴木純子。
東京地学協会会長 野上道男。一般社団法人日本ウォー
キング協会会長 畑浩靖。日本土地家屋調査士会連合会
会長 岡田潤一郎。伊能忠敬大河ドラマ化推進協議会会
長 木内志郎。

顕彰会は記憶に残る式典であった。毎日新聞に載り、
協力者の子孫の方々から感激して子孫との連絡にあつた
戸村さんに多くのお礼の手紙が届いた。

三、NHK首都圏ネットワークでの放映、富岡八幡宮でのプレスリリース

戸村さんはNHKの押尾駿吾アナウンサーと連絡を取り合った。伊能忠敬について二〇二四年四月五日、NHK首都圏ネットワークで放映された。伊能忠敬の生誕地から伊能忠敬記念館までロケをした。昼は地上測、夜も寝る間を惜しんで観測地点の地球上の位置を天体観測で求めたことが、精密な伊能図実現の理由だったということがわかりやすく編集されていた。

二〇二〇年渡辺一郎さん九〇歳で亡くなったが、戸村さん達に「忠敬の語り部として動いてくれ、そのために積極的に研究し講演などの活動をするように」と言い残した。その意思を継ぎ、二〇二三年十一月二四日、伊能忠敬測量隊、天体観測データベースWEB公開、富岡八幡宮で横溝高一、戸村茂昭が記者発表をした。戸村さん独自の伊能忠敬研究は「天体観測データベース」。一次から三次の全天体観測データを解析し、特に一次、二次の解析は戸村さんが初めてである。

この解析で、伊能測量の新事実が判明した。

一、伊能測量隊の天体観測 北向きと思われていたが七

二パーセントは南向きだった。

二、伊能測量での緯度の決定方法 観測地での観測値と

隠居宅で高度差から緯度を決定した。

三、隠居宅の緯度の決定方法 記録はないが天頂付近で

南中する恒星で決定したと推測

四、北極星はほとんど観測していない 当時天頂から

一・五度程度ずれていたもので、半年強は昼間に南中するため観測できなかった。

五、月食観測データの解析

つまり今回の天体観測データのデータベース化は国内では初めての試みである。伊能忠敬は頭の中に星座盤があり逆に星を見て時間がわかった。

このような戸村さんの活動は古巣である「NTTデータ同友会会長表彰」にノミネートされた。ノミネート理由は「伊能忠敬研究会における星の観測・プレス発表・シルバー人材センター編集長」などの活動が社会貢献活動として会員の模範となる優れた活動と認められるため今年度の本部会員の表彰候補とさせていただきます。とのことであった。

戸村さんはノミネートされたことを大変喜んで、七月二三日の発表結果を楽しみにしていたが、その当日にお亡くなりになり受賞の連絡は翌日のメールで届いた。悲しくも不思議な巡り合わせにNTTデータ同友会は十月の表彰式において戸村さんに特別に授与することになった。

プシュ！ ゴクゴク、ハァー！
冷たいビール、夏到来！！

五反田 萩原 正道

夏になると、楽しみにしていた冷たいビール、その季節がやってきた。

ビールをおいしく飲むには、やはり体を動かし、いっぱい汗を流すこと、これにつきる。基本は、散歩、自転車、畑仕事、家事、その他いろいろ、日中汗をかいて、一生懸命体を動かせば、その夜に飲むビールは、一層うまみが増し、効果バツグンである。

昼すぎから、冷蔵庫に、缶ビールとコップを冷し、さあ！その瞬間が、プシュ！ コーコー、ココ。なんともいえない。「ハイ、いただきます」 ゴク、ゴク、ゴク。ハァー、うまい！！ 明日も頑張るぞ！！

ビールは、平成の頃から、このメーカーが一番おいしいと思っていて、家で飲むビールは必ずこのメーカーこの種類に限る。他のメーカーや、発泡酒、ノンアルコールなど、まったく目もくれず、このビール一本やり、プシュ、ゴク、ゴク、ハァー、これにつきる。

よし、明日も体を動かし、汗を流し、うまいビールをいただくぞー！！

今、わたしの庭として

市原市(元富口) 村上 久江

そう広くないわが家の庭には、松、山桃、棕櫚、金木犀、柿、梅、椿、山茶花、満天星しゅうたんせいとめいっぱいの樹々が植えられた。夫が庭師と相談して造らせた庭だ。家と庭の間には砂利を敷き石を並べ、灯籠も置いた。

家族をもち一軒家を建て庭には好みの樹々を植え、仕事から解放された休みの日には庭に植えた樹々とともに過ごす、成長を見守る。樹のきっぱりとした健やかな立ち姿、年々歳々天に伸び枝を広げ伸ばし緑の葉を豊かに繁らせる樹の悠久は、夫にとって憧れだったのだろう。

口数の少ないほうだった。父は戦死し母はふたたび他家へと嫁いで行き、祖母に育てられた夫。どこか寂しさを内に秘めていた。樹々の深い静けさのなかに身を置き、樹々と語らっていたのか。余命三年を宣告された日の夕暮れ、自身も一本の樹に同化したように静まり、松の枯れ葉を一本一本丁寧に取除いていた。

庭師の選んだ梅の樹は、年毎に蕾をもち白い可憐な花を咲かせ、たくさんの実をみのらせた。だが老木であつたらしく幹がぐねりぱっくりと開いたことがあつた。夫はかいがいしく薬剤を求めてきては手当をほどこした。

そしてどの樹にも季節のどこかで肥料をほどこすことを忘れなかった。それに答えるようにどの樹も凜と天を突き、緑鮮やかな葉を繁らせ枝を縦横無尽に広げた。

肥料をほどこし成長させてはまた剪定をする、その繰り返し返しのなかに夫と樹々との歴史がはぐくまれていったのだろう。

梯子を掛け松は特に丁寧に時間をかけた。消毒ももちろんした。噴霧器を背負い、眼鏡をかけマスクで口を塞いだ姿はいっぱしのものであつた。どれも初めてのことだつたようだが、本を求めて勉強したり店頭で聞いたり樹々との関わりを深くしていったようだ。

夫が逝つたあと、鬱蒼としてまだ伸びようとする樹々のほとんどを伐採した。消毒と剪定、肥料のほどこしをわたし一人ですることは到底できなかつた。庭の真ん中あたりに植えてあつた丈の低い躑躅つづしとさつきはそのまま残した。わたしでも剪定できる、それに花も咲いてくれるからだ。

さっぱりと樹々が伐採されわが家は隣近所から丸見えになつたが、隣の家も直に眼に飛び込んでくる。それもよいのだろう。眼に見えるものは正直に見て、こちらも正直に見られるのだ。

さあーこれからこの庭をどうしたらよいか。夫が丹精を込めて育てた樹々の切株が在りし日々を偲ばせる。殺風景になってしまった庭をなんとかしなければならぬ。そうだ伐採した樹の根元から生えてくる蘗ひばえを育てよう。わたしの手の届く丈まで育てよう、それならわたしでも剪定できる。垣根のように植えてあった山茶花三本と金木犀一本の蘗を選んだ。

年毎の成長を見せ、これ以上伸びてはならない、枝を増やしてはならないというほどに成長した。先のことはわからないが、わたしの責任の及ぶ範囲のものにしておかなければならない。樹には申し訳ないが容赦のない剪定をする。

樹々に囲まれ充分に日差しを浴びることができなかつた躑躅とさつきが、これまでの鬱屈をはらすように生き生きとたくさんの花を咲かせた。庭の一角に埋めた百合の球根が根付いて今年も香り豊かな大輪の花を咲かせてくれる。

わたしは短歌に詠む。日々のささやかなことを一首に作品化することは嬉しいことだ。そしてそれを投稿する。老いていく日々を前向きに生きようとする糧となる。

鉢を割り地に根付いた木槿むくげもぐんぐん伸び幹を太くして躑躅の丈を超えた。白い花びらのなかの紅色が美しい。

木槿の秘めているもつともつと強く逞しく成長したいというエネルギーやその純粹さを、いまさらながら恋しく思う。

向日葵の苗も日毎の成長を見せ、大きな葉がゆらりと揺れて花の開花が待ちどおしい。

亡き夫が生涯の友のように愛した庭・庭の樹々。わたしも細やかな眼をそそぎ、わたしの庭として大切に育てていきたい。

玄冬の旅はつづく

五反田 竹内 克隆

かつて本誌十号に、後期高齢者になった自分を「玄冬の旅人」と題してエッセイを投稿したことがあった。四季や人生を色で表現した中国の陰陽五行説から、黒色の「玄冬」を人生の休息・終末期として、その中を歩んでゆく旅人にたとえたわけである。

旅を始めてから今年で七年になる。この間に大きな出来事がつづいた。コロナ・パンデミックの恐怖に人々は怯えた。能登の大震災に台風、大雨、記録的猛暑など自然災害が毎年列島を襲った。自分自身も二年目に大病を患った。だが、幸運にも御仏のお加護をいただき今なおつづけていられる。そんな感謝を胸に刻みながら旅の一端を記してみた。

(一) 親友との別れ

高校二年の時に教頭先生から受けた漢文の授業の一節が今も記憶に残る。

『尋故隱君』 中国漢詩 (高啓・作)

水を渡り 復水を渡り
花を看 還花を看る
春風 江上の路
覚えず 君が家に到る

(何度も何度も川を渡る道すがら、花を見、さらに咲き誇るあたりの花を見る。春風そよぐ川のほとりの路を行くと、いつの間にか君の家にとどりついてしまった)

陽春の一日、この漢詩のように心うきうきワクワクの気分で親友宅の訪問となれば最高に楽しいが、暗く沈んだ心で訪ねたのは大寒を過ぎた酷寒の日であった。

A君の訃報を知ったのは、令和七年一月、送られてきた「OB会の会報」を見た時だった。これによると亡くなったのは令和六年十一月、すでにふた月が経過していた。体調が思わしくなかったのは、これまでの電話のやりとりで認識していたが、「まさか」と一瞬目を疑った。だが、記載に虚偽があるはずはなく、受け入れることしかできなかった。

彼とは昭和三十七年(一九六二)四月、縁あって同じ企業で働くことになった。新人の研修会で初めて出会い、出身が千葉県同士の誼で意気投合し、独身寮も同じ部屋

になった。寮生活は二年間、勤務地は私が日本橋室町、彼が麻布でスタートした。

高校では全国大会に出場したラグーマンで、浅黒く精悍なマスクにその片鱗を見た。半面、繊細で優しい男でもあり、酒を酌み交し語り合った青春の日々が懐かしい。その後はお互いに家族ができて、また転勤も重ねて交流は年賀状だけになったが、四十の半ばを過ぎた頃に千葉の職場でめぐり会って、三年間の濃密な時を過ごした。

こよなく酒を愛した二人は仕事を終えると週に四日は酒場通いで、双方の家内から「帰ってこないでどこかに泊まったら」とよく言われたりするほど、酒に落とした昭和の男の情熱とロマンを満喫してきた。

自宅（市原市）の真新しい仏壇に焼香した。気付かなかった疎遠を心で詫びた。奥さんにこれまでの交流を詳らかに話して、最良の友人の逝去に哀悼の意を伝えた。

「医師から余命は半年と言われていましたので、私も息子たちも心は決まっていました。好きなように生きてきた人ですから、本人は満足でしょう。ただ、セカンドオピニオンの選択もありだったかな」

奥さんは淡々と気丈な口調で家庭内での生活ぶりなどを話し、わずかに選択しなかった悔しさを滲ませたが他はすべてを受け入れた気持ちの整理をうかがえた。

「Aちゃん、俺もそのうち行くから待っていてくれ。いい店を見つけておいてくれ」

私はもう一度焼香してから自宅を後にした。

我が家の庭では彼からいただいた「馬酔木」が毎年可憐な花を咲かす。旅立ちから半年以上が過ぎた。今日も「A君の樹」を見て思いを寄せながら我が旅をつづけている。

（二）いのちの洗濯

町内の友人たちと月に一度の楽しみがある。食べて飲んで喋って歌って一時を過ごす。場所は隣のカラオケボックスでしかも廉価である。メンバーは後期高齢者が五人と前期高齢者一人の六人、男二人に女が四人だ。

それぞれに家族や友人、趣味や付き合いもあるが、ここに集えば日頃のほこりを洗い流してリセットした気分になる。

数種類あるメニューから好きなものを昼食に選び、卑近な話題や情報交換をしながら楽しく飲んで食べ、時には高尚な話題も交ぜる。

カラオケは十八番から他のジャンルまでそれぞれに数曲を披露して、予約の三時間があつという間に過ぎる。ほとんどが懐メロで新曲はない。

カラオケ画面の若き日のスターたちの雄姿と、歌詞を追いつながら自分たちの青春を重ねると、いつまでも昭和が消えないで残っているのがうれしい。しあわせな余韻を残しながら次回を決めて散会する。

「願わくはみんな息災でいつまでも会えるように」今回も祈りをこめた。

(三) 一言啓上

参議院選挙が終わった。結果は自民・公明与党の大敗となり、衆議院同様に過半数を割りこんで少数与党になった。政策、法案がなかなか決定・施行できず、野党の政策や意見を忖度しながらの綱渡りの、その場しのぎ的な混迷政権がこの先もつづくのだろうか。

マスコミや専門家の見方を総括すると、今選挙の最大のポイントは二十〜四十代の若い層の選挙への参加が勝敗を決めたと言えそうだ。無党派層が多いと言われる世代が動けば結果は変わる。

SNSの活用など選挙運動にも変化が生じて、勝利した党は分かりやすいメッセージの発信でしつかりと若者のハートを掴んだのであろう。あまつさえ既成政党離れが顕著で、自公ほか野党も得票数の激減した党は多い。

時代は変わり選挙戦も変わってゆくのが明白になった。

有権者の主役はこれからの国を背負ってゆく若い世代になりつつある。

多党化の流れに与党も野党も政権を担うには連立が必須要件であり、「虚心坦懐」連立を確立するのが急務と考える。決めるものも決まらず、いつまでも政争の継続では国内外に山積する難問に対処できず国益を損なってしまう。政治の安定こそ国民の待望するものである。

国民を代表する議員の皆さん、真の政治家となり国家国民のために働くこと、いつやる？「まさに今」でしょう。

令和七年も後半に入った。今日も「体操と勤行」で朝が始まり、「日記」で締める作業は変わらない。猛暑にも怯まず雑草との戦いは果てしなくつづく。

二河白道（三途の川）の灯はまだ見えない。明日突然現れるのか？それはそれでいい。いつでも覚悟はできている。

改めて仏さまに感謝とともに旅はつづいてゆく。

・出典 漢詩訳〜スマホ資料より